

## 圖版要項

## 一 董其昌筆 倣楊昇沒骨山水圖（原色版）

香港 程 琦 氏 藏

絹本着色 挂幅装 縦 七・三（二尺五寸五分）  
横 三・一（一尺一寸三分）

畫面右寄りに青・緑・橙の主山四峯を上下一列に重ね、或は密に或は粗に點苔を施し、わづかに披麻皴を添へる。藍の遠山もまた輪廓を加へない。主山の盡きるあたり、紅緑の叢樹に圍まれて、青赤に彩られた樓閣があり、かたはらに一字が樹間に隱顯する。雲霞をへだてて中景、水汀をあらはす。近景には七八株の樹木、紅緑相映發し、中には落葉した枝もある。樹幹は數筆にして成り、枝葉も草草たる筆致で描く。木だちの間の茅舍、筆線賦彩みな代赭。樹下の數石は白緑、かすかに皴と點苔を加へ、一部に渲染、柔軟な輪廓線も見える。この一幅、まさに秋日夕照の景を畫いたものである。

圖の左上、首に「画禪」の朱文長方印（挿圖第一）を押し、次の贊と款署がある。

余曾見楊昇眞蹟

沒骨山。乃見古人戲

筆奇突。雲霞滅沒。

世所罕覩者。此亦擬之。

乙卯春。董玄宰識

乙卯は萬曆四十三年（一六一五）に當り、董其昌（一五五—一六三六。字は玄宰、號は思白、諡は文敏）時に六十一歳。款署の下に「董其昌」の朱文方印（挿圖第二）を押し、右下隅に「麓邨」の白文方印（挿圖第三）、左下隅に「朝鮮人」の白文印

及び「安氏儀周書畫之章」の八字を四字づつ二行に刻した白文印（挿圖第四）がある。この三印はいづれも康熙・乾隆期の鑑藏家安岐（字は儀周、號は麓村）の印として知られるものである。この三印の押してある部分は、きはめて完好な全幅の絹面の状態と對蹠的に、著しく傷んでゐる。これは前にあつた印を剔去して安氏の印を押しただけであつて、現在の三印の各々と一部重複して、三個の朱文方印のあるのがかすかに見えるが、印文は読み得ない。

安岐の三印に導かれて、乾隆七年（一七四二）に編したかれの著録『墨緣彙觀』宣統元年端方序、四卷本）を繙くと、その名畫上卷の明の部に次の記述が見出される。

## 倣楊昇沒骨山水圖

絹本小條幅。長二尺七寸餘。潤尺許。重設色沒骨山水。中作高山平麓。叢樹幽亭。紅綠萬狀。宛得夕照之妙。上行草書題。唐子云紅樹秋山飛亂雲。又小行書款。倣楊昇沒骨圖董玄宰。下押太史氏白文印。董其昌朱文印。首押畫禪二字朱文印。相傳。設色沒骨山水。昔始於梁張僧繇。然考歷朝鑑藏及圖繪寶鑑。未嘗有僧繇山水之語。即楊昇之作。亦未見聞。自唐宋元以來。雖有此法。偶遇一圖。其中不過稍用其意。必多閒工筆。未見全以重色皴染渲染者。此法誠謂妙絕千古。若非文敏拈出。必至淹滅無傳。今得以古反新。思翁之力也。斯法之作。余凡見五本。皆佳。當以此幅更爲甲觀。

安岐の掲げたこの小條幅は、下永譽の『式古堂書畫彙考』（康熙二十一年（一六八二）自序）の書考卷三十に記す「董文敏倣楊昇沒骨圖并題」と同本であり、また本幅と畫致を等しくすることは直ちに察せられるが、贊文・款印・法量より見て、本幅と全く別本たることは明かである。しかし安岐のこの書の自序に「凡有古人手跡。得其心賞者。必隨筆錄。……遂將平昔所記。擇其尤者。復爲編次。」とあり、また右の記述の末尾に「斯法の作は余凡そ五本を見たり。皆佳なるも、當に此幅を以て更に甲觀となすべし。」とあるから、本幅を安氏の精鑒を経た五本中の一本に擬してさしつかへなからう。

挿圖1. 董其昌畫禪印（原寸）

安岐もいふやうに、張僧繇に山水の作あることを記した信憑すべき史料もなく、また唐の楊昇は人物寫照の專家として知られてゐる。また元來花卉畫に於て發生した沒骨の畫法と概念とがいつい

にして山水畫にも轉用せられるに至つたのであらうか。いま的確にその經緯をたどることはできないが、骨法用筆の否定といふ點で、技法的にも思想的にも、水墨畫との内面的關聯を無視し得ないであらう。ともかく董其昌の時代には、沒骨山水が遠く蕭梁の張僧繇にはじまり、盛唐の楊昇がこの法の妙を得てゐたと信じられ、かれ等の名を冠する畫蹟が存し、董其昌にこれらに倣つた作品があつたことはたしかである。右の安岐の記述のほかに、例へば龐元濟の『虛齋名畫錄』（宣統元年一九〇九自序）卷八に著録する「明董文敏仿張僧繇翠岫丹楓圖

挿圖2. 董其昌款印（原寸）

この倣楊昇沒骨山水圖軸は、目なれた董其昌の眞蹟に比して、一見はなはだ奇異の畫體に成り、また贊の書態や文章、筆者の印章などから偽作の

軸、或は昭和六年日華古今繪畫展覽會に出品された「沒骨青綠山水圖軸」（『宋元明清名畫大觀』一六四頁）のあることは、たとへこの兩幅が董其昌の眞蹟でないにしても、この間の事情を物語るものである。さらに沒骨山水を通ずる張僧繇・楊昇・董其昌三者の不離の關係は、遂には定論となつたらしく、それは吳修（一七六五—一八二七）の『青霞館論畫絕句』（『美術叢書』二集第六輯四冊）の左の詩ならびに自注にも明かである。

楊昇蒲雪畫峒關。紅艷爭看沒骨山。千載僧繇遺法盡。祇留一脈在人間。

楊昇峒關蒲雪圖小幀。用沒骨法。絹極光潤。傳色濃艷。青紅奪目。董思翁。每衍爲長幅。筆法宛似。

さて董其昌のころ、古來相傳の沒骨山水と稱したものは、はたして如何なる畫であつたか。これを知る一資料となるのは、かつて故阿部房次郎氏の藏有に係り、いま大阪市立美術館にある「名賢寶繪冊」の第一開、雪山行旅と名づける一圖（『爽籟館欣賞』第二輯二〇）である。前輩もすでにこの畫冊を、李佐賢の『書畫鑑影』（同治十年一八七一刊）卷十二（冊類 宋附元明）に載せる「名賢寶繪集冊」にあてた。同書には左の如くいふ。

重設色沒骨畫。雪山行旅圖。樹作紅黃。山巒施粉苔。攢朱點。穠豔而不傷雅。山前一客。騎驢篤速。有寒態。一人曳驢過橋。無歛。意在楊昇僧繇之間。

挿圖4. 安岐鑑藏印 其二（原寸）

挿圖3. 安岐鑑藏印 其一（原寸）

疑ひを挟む餘地もある。しかし細檢すれば、それら眞筆と冥合する點も少くない。例へばこの幅の樹法や畫面の隨處に率意に加へられた點描などはそれである。更に華かな色彩の裡にきはめて繊細な神經を秘めてをり、まさに明人の所作、また摹偽の筆のよくするところではない。賛文印章については別な解釋も可能であらうし、沒骨山水の畫體と董其昌との關係はすでにのべた。蓋しこの畫はかれの手に出づるものと品定して誤りないものである。

かの雪山行旅圖の濃重な賦彩、平板な顏料の羅列は、ただ皮相に沒骨の字義を存したに過ぎない。本幅はこの種の作に本づいて畫いたものに相違ないが、それに比し彩色はるかに澄淡、布置また一幅の山水畫としての結構を備へてゐる。全畫面に墨筆の迹なく、極力勾勒の筆を省いて沒骨の意を顯してはゐるが、皴法や樹石法に南畫の描法がにじみ出てをり、これが一種隱然たる骨氣となつてゐる。雪山行旅圖の如きものからこの種の畫を作り上げるところに、古人に倣ふことを標榜しながら、文人の畫としての様式を生み出すことに終生の努力を傾けた董其昌の、いはば「古を以て新に反る」その畫業の根本性格が、やはり確然と示されてゐるのであつて、現存の沒骨山水圖中の尤品たるこの幅の意義も、またここに存するのである。(川上 涇)

## 二・三 子庭祖柏筆 石菖蒲圖

神奈川 梅澤彦太郎氏藏

絹本墨畫 挂幅装 豎 一〇二・〇浬(三尺三寸六分)

横 四五・六五浬(一尺五寸一分)

——島田修二郎「子庭祖柏筆石菖蒲圖」參照——

## 四 a 色繪 山水圖大皿

東京國立博物館藏

徑 三二浬(一尺五分) 高 六浬(二寸)

## b 色繪 鶉圖大皿

石川縣廳藏

徑 三〇・三浬(一尺) 高 六浬強(二寸)

## 五 a 色繪 木瓜形山水圖大皿

某氏藏

長徑 三五・五浬(一尺一寸四分) 短徑 二一・二浬(一尺三分)  
高 五・〇浬(一寸九分五厘)

## b 色繪 幾何文大皿

某氏氏

徑 三三・九浬(一尺一寸一分五厘) 高 六・八浬(二寸二分五厘)  
——以上四・五 中川千咲「古九谷意匠の一考察」參照——

昭和二年七月—十二月 受贈及交換圖書雜誌

近代日本美術全集 2, 4

現代日本畫の百撰印譜 河原義和著

群馬縣文化財圖錄

大日本史料 二編之九 三編之十二 五編之十五

六編之三十一 七編之十二 九編之九

廣島縣古文書目錄

世界美術全集 10, 15, 27

重文觀音堂(光堂)修理工事報告書

重文太山寺仁王門修理工事報告書

醍醐寺新要錄 上、中、下

書道全集 12

福岡縣文化財調查報告書 17の1, 2

福岡縣史跡天然記念物調查報告書目錄

大日本古文書 家わけ十六、十七、幕末外國關係文書之二十五

東都文化交易株式會社

著者

群馬縣教育委員會

東大史料編纂所

廣島縣教育委員會

平凡社

文化財保護委員會

京都府教育委員會

平凡社

福岡縣教育委員會

〃

東大史料編纂所